

中村栄孝君の「日鮮関係史の研究」上、中、下三巻に対する

授賞審査要旨

わが国と隣邦朝鮮との関係は、有史以前から極めて密接であつて、従来彼我の関係を色々な角度から個別的に研究した論著はかなり多く発表されているが、上代を対象としたものを除いては、明治維新以前を研究したものは少ない。中村栄孝君は昭和初年から第二次大戦の終りまで朝鮮で過ごし、その間終始朝鮮史編修会に勤めて、職掌柄永年広範囲にわたつて、朝鮮の内外における既刊未刊の史料を普く搜索し精査し、これを研究駆使して、その成果を逐次学界に発表し、戦後もこれを継続して来て、永年の研究は積つて多大な量に上つている。その中から日鮮交渉史に關するもの四十一編を選んで、更にこれを増補改訂して系統的に整理配列して、上、中、下三巻二千余頁に上る力作を發表した。上は十三世紀鎌倉時代から下は十九世紀半江戸時代後期に及び、その間各時代ごとに永年の研究成果に踏まえて広い国際視野に立つて概観を下し、これに配するにそれぞれの時代中にあつた重要な問題点を精密に考究して、これが裏付けとなしている。

上巻は十八編から成り、その第一の「十三・四世紀の東アジアと日本」と第五の「室町時代の日鮮関係」の兩編によつて十三世紀から十六世紀末頃に到る東アジアの国際関係と日鮮関係の推移を概観し、第二、第三の編で、この時代国际上重大事件である文永・弘安の役における高麗の立場と役割について詳論し、第四の編でこれに先立つ後百濟王と高麗太祖の日本遣使の事情を明らかにした。第五の編では、室町時代に入って倭寇から日鮮修交に移る新関係の

展開と交通の統制を眺め、第七の編で当時わが対外関係上の一大事件となつて、既に先学の研究も色々發表された応永の外寇を朝鮮側との関係からも考究し、第十から第十五の編では、主として朝鮮側からの日鮮通交貿易の統制に當つて制定された書契、浦所、倭人上京路、受図書人、受職倭人について、その性格と対策とを特に綿密に考究し、その彼我の通交貿易における意義を明らかにしている。更に第十六の編では、齊浦、富山浦、塩浦の三浦において一時三千人を越える在留日本商人の生活の実態と、これに対する貿易制限の強化を述べ、終に一五一〇年の彼等の争乱勃発の経過を詳論し、最後の第十八の編では、従来学界で「右武衛殿」を以て織田信長の朝鮮遣使と解していたが、実は將軍足利義昭がその地位挽回工作の一環として企てた九州探題等の遣使なることを明らかにした。

中巻は十編からなり、主として豊臣秀吉の外征に関する論考を収め、第一「十五・六世紀の東アジアと日本」の編では、東アジアの通商圏の拡大と変貌、その間における日明鮮三国の関係を述べて、秀吉の外征の前提環境を明らかにし、第二の編では秀吉の文禄慶長両度の征戦の起因から戦争の終結に亘つて特に詳述し、第三の編では秀吉外征の目的について、従来日明勘合貿易復活要求が強調され定説化したが、これを再検討し、講和の条項の推移を吟味して、わが当局者が勘合の内容をなす封貢の字義を厳密に解せず、単に漠然と公私船舶の往来を求めたため、講和の過程において秀吉の希望が否定されて決裂に陥つたことを論証した。ついで、第六の編では、これまで疑問視されて来た投降倭将金忠善が実在の人物であることを究明し、その伝記と文集成立の過程を考え、これと関連して多数の投降倭人の存在とその待遇にも触れ、第七、八の両編では、この戦役の俘虜鄭希得の滞日日記「月峯海上録」の内容と俘虜金光道送還の事情を考究し、その他の諸編において、この戦争と外交に関する朝鮮側の重要基礎史料について詳細

に解説している。

最後の下巻は八編から成っているが、巻末に別編として五編を附載している。その中第一の編は十五世紀に入り朝鮮側の対日認識も漸次深まり、交隣体制の基本となった癸亥約定（一四四三年）が成立するようになった経過を述べ、歳遣船、特に対馬宗氏の歳遣船の統制と定数の体制化の実情を説き、ついで第二の編で十六世紀に入り対日約定の更定による対馬宗氏の朝鮮貿易独占の過程を明らかにし、次の江戸時代に入り宗氏が朝鮮貿易に指導的立場を維持せんとする所以を述べ、第三の編で「江戸時代の日鮮関係」を概観し、幕府が文禄・慶長の役により一時全く悪化中絶した彼我の交隣関係の回復に多大な熱意と努力を傾け、朝鮮使節の来朝を見て、慶長十四年己酉約定の成立により、その関係が一応軌道に乗り、その後江戸時代を通じて朝鮮通信使の来朝が続行し、日鮮相互の認識も深まったこと、及び対馬藩を中心とする日鮮貿易の発展と貿易の実態など一々典拠を挙げて詳述し、第四「通信使と大坂」の編では武家政権と朝鮮外交の性格を明らかにし、通信使来朝による文化人との交歓、文化の交流を説き、その紀行文を通じて十八世紀初期の大坂の景観、繁栄と文化を側面から眺め、転じて第五の編で朝鮮における日本語学修書「捷解新語」と「倭語類解」の刊行とその性格などについて解説し、第六の編で漂着オランダ船の処遇送還をめくり、対馬藩がこれを利用して貿易拡大を計り、朝鮮がこれに対応して折衝した経緯とその歴史的意義を追求し、第七の「竹島と鬱陵島」の編では、古文獻に現われた両島の古名、別名を調査峻別して、竹島には既に十七世紀初期から日本人が松江藩の許可を得て渡航し島の物産を常時採取して来たことを明らかにした。そして最後の第八「外交上の徳川政権」の編では、まず東アジアの国際秩序に対する不整合的な日本外交の移行する過程を述べ、江戸時代に入りこれを

繼承し、幕藩体制の形成、幕府権力の確立期に「日本国大君」号の設定により、武家外交も全く強化確立して幕末に及んだが、朝鮮はこれに対応して交隣関係の調整に努め、一方大陸に勃興した大勢力清帝国の対鮮政策の推移にも対応し、一面これと協調しつつ、日本との関係を利用して清国の圧力の回避につとめ、やがて十九世紀に入り東アジアの国際情勢は激動期に入つて、日本では明治政府が成立し幕府の外交権を接收し、彼我の關係に新局面が展開したことを論じている。

卷末に附載した五編では、朝鮮において十一世紀中頃に始る活字印刷術の發達と、大藏経と高麗史節要などの印刷、刊行年、その地方版や伝存について考察し、ついで日鮮關係の史料として重要な清太宗の朝鮮征伐に関する文書や特に前後二百七十年にわたる「承政院日記」の改修事業を述べ、終りに中村君の研究の基礎となつた朝鮮史編修会の朝鮮史の編修と朝鮮史の史料の蒐集及び朝鮮史やその他関連史籍の出版などの諸事業の経過を詳述している。

以上本書の内容の梗概であるが、中村君の永年にわたる撓ゆまぬ努力とその極めて手堅い研究によって、日鮮關係史上の重要な諸問題を捕えて、これを精密丹念に考究論述し、これに立脚して十三世紀以降永年にわたる彼我の關係を考察してあり、その間先人未踏の点を解明し、あるいは従來の学説を訂正した処も少なくない。特に對手側の朝鮮の膨大な史料を駆使して、数百年にわたる朝鮮の国情の変動と、これに関連して動揺する対日交隣貿易政策の推移を綿密に追求論述してあつて、日本の対外關係史に新生面を開いたものであり、日鮮關係史の研究は、ここに重要な文献を加えることが出来て、今後この分野の研究の推進に強固な礎石を据えたものと言える。